

令和元年6月11日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2015～2018

課題番号：15KT0008

研究課題名(和文)「老いの文化」の形成と機能に関する比較に基づく人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study on the Formation and the Function of the "Culture of the Aged"

研究代表者

内堀 基光 (UCHIBORI, MOTOMITSU)

放送大学・教養学部・客員教授

研究者番号：30126726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：異社会間、異種間における老年概念の成立と異世代間関係の比較に関して、以下の調査により実証データを得、理論化の進展を果たした。(1)マレーシア・サラワク州のイバン社会における老人ケアと生涯コース(内堀)、(2)タンザニア・マハレ国立公園内のチンパンジー社会のデモグラフィーの把握(中村)、(3)福島県金山町における高齢者福祉の実態(加賀谷)、(4)フィンランド南西部での独居高齢者のインタビュー(高橋)、(5)マレーシア・クランタン州のオランアスリの人口学的な動向(小谷)、(6)全米117大学での50歳以上を対象とする低料金コースを提供する学校での高等教育ニーズと若者との交流に関する調査(広瀬)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「老い」をめぐる文化に関して、多角的な視点から社会・文化間の比較および種間比較を行い、それぞれの社会に生きる個々の人間にとって「老い」がもつ正負の価値を実証的に秤量したことが本研究の成果である。これによって「人間の生涯」の意義を、「老い」から遡行的に語る回顧生活史と、日常生活における老人同士および老若世代間のインタラクティブな交渉の観察を通して、理論化することができた。これにより実践面まで含めて「老い」に文化がいかに関わるかという議論に、学術的実証的に意味ある貢献をなした。チンパンジーという人間にとっての異種における高齢個体の存在に目を向けられた意義も大きい。

研究成果の概要(英文)：The following empirical data collection by fieldwork and theorizing efforts were advanced in the framework of comparison of the notions of the 'elderly' and intergenerational negotiations. (1) Lifecourse among the Iban of Sarawak, Malaysia, (2) Demographic composition of Chimpanzee troops of Mahale, Tanzania, (3) Welfare policy and practices in a Japanese rural township, (4) Interview research among the single elderly residents in a rural area of Finland, (5) Demography and the position of the elderly members among Orang Asli peoples in Kelantan, Malaysia, and (6) Needs of elderly higher education based on trends and intergenerational relations in a low-fee US schooling course.

研究分野：文化人類学

キーワード：老年学 生涯学 高齢者ケア ライフコース 異世代間関係

1. 研究開始当初の背景

「老い」という現象が生物的生理的現象であるとともに文化的に構築された観念とイメージによって厚く被覆された現象であることは言うまでもない。本研究はこの自明な背景的事柄に学術的に正面から向きあうことによって、しばしば自明性の蔭で深く検証されずに流通してきた、通俗的とも言える諸言説に対し、実証的な意味での正否を問う。社会における老人（高齢者）の存在と位置づけを人文社会学者が「新たな老年研究」Neo-gerontology として研究主題とすると、それを実践的に解決されるべき「問題」としてのみ語られることへの批判的視点でもあった。ただし、「問題」としての老人ないし高齢者という設定自体が時に暗黙の経済的効率や政治的単位を前提にしているからである。本課題では、「高齢化社会」問題の奥底にある、人々の間に老人（「老いた」もの）という語で指示される、あるいはそうしたカテゴリーでまとめられる存在が形成されていることと、それが問題として設定されることになる事態とのあいだの論理的関係を根底的に問い直すこととした。

本研究では、人々の間に老人（「老いた」もの）という語で指示される、あるいはそうしたカテゴリーでまとめられる存在が形成されていることと、それが問題として設定されることになる事態とのあいだの論理的関係を根底的に問い直す。このことは、しかしながら、個人としての老齢期の心身状態の変化、諸個人とその関係の集合としての社会の持続を保証する慣習と制度の変質の可能性がもたらす状況について、現実即して判断し、有効な対応を構想することを排除するものではない。それどころか、まさしくそのためにこそ、根底的な問い直しが必要なのである。老年問題と結びつけて議論されることの多い福祉について、学史的にはたとえば、現代における福祉社会や市民的連帯の必要性（必然性）を理論的に基礎づけるものの中心に、R・ベネディクトによる障害のある少数者の多数派文化への適応の理論化、B・マリノフスキーによる個人の生物的な必要（need）に対する給付としての社会機能、あるいはマルセル・モースによる贈与と互酬性の体系についての考察など、初期の人類学の理論があること、これがスウェーデンの福祉活動家ニリエや英国の社会政策学者 R・ティトマスなどに社会福祉の概念的支柱を提供したことを指摘することができる。こうしたことだけでも、たとえ迂遠に見えようとも、人類学の理論が現実の実践的課題に深い関与的關係を有することが証されると考えた。

2. 研究の目的

「老い」をめぐる文化に関して、多角的な視点から社会・文化間の比較および種間比較を行い、それぞれの社会に生きる個々の人間にとって「老い」がもつ正負の価値を人類学的に秤量することが本研究の目的である。この比較による秤量は、「人間の生涯」の意義を「老い」から遡行的に語る回顧生活史の収集と、日常生活における老人同士および老若世代間のインタラクティブな交渉の観察を主とする。これにより実践面まで含めて「老い」に文化がいかに関わるかという議論に、学術的実証的に意味ある貢献をなそうとする。

「老い」の生活そのものに焦点を当てる人類学的研究は、囲われた制度内における一様な「老い」ではなく、必然的に「老い」の多様性を確認することを軸に展開してゆくことになる。この多様性は、一つには人間集団間の文化の多様性に由来するものでもあり、もう一つにはある一定の文化的前提の中で、個人（個体）間のレベルでさまざまなかたちで連続性をもって生成する多様性でもある。本研究が目指すのは、この2つの多様性に即して、比較による検討を進めてゆくことである。

より具体的には、如上の個別民族誌的研究と、大きくは生物種としての普遍的特性に関わる人類学的比較研究、およびその中間領域での文化比較という3つの軸を立てる。これらの軸との関係で言えば、研究代表者の内堀基光は、東南アジア島嶼部1ボルネオ島のイバン人のあいだでの民族誌的調査に基づいて、死という生物的にも汎人類文化的にも普遍的な事象であり、しかも個別文化に特有の意味づけを中軸に研究歴を積み重ねてきた。そこで死に向かう一つの道程としての「老い」にしかるべき関心を払ってきたが、そこから得られた発想は、「死ぬこと」は生物的に必然であるが、「老い」は必然ではないどころか、むしろ「得難きもの」であり、そこから人間社会における老人のもつ知識の重要性、精神的・社会的役割、ときには老人「権力」とまで言っているものが生成するということであった。これが代表者内堀をして本研究に向かわせた最大の動機である。これをより展開的に言い換えれば、「老い」は質的にも量的にも「人間の生涯」の総収支決算のなかで秤量すべきテーマだということである。

3. 研究の方法

必然的に「老い」の多様性を確認することを軸に展開してゆくことになる。この多様性は、一つには人間集団間の文化の多様性に由来するものでもあり、もう一つにはある一定の文化的前提の中で、個人（個体）間のレベルでさまざまなかたちで連続性をもって生成する多様性でもある。本研究が目指すのは、この2つの多様性に即して、比較による検討を進めてゆくことである。より具体的には、如上の個別民族誌的研究と、大きくは生物種としての普遍的特性に関わる人類学的比較研究、およびその中間領域での文化比較という3つの軸を立てることにな

る。このうち量的秤量に関しては、人類生態学や霊長類学をはじめとする生物生態学的な生涯研究のアプローチを必要とするものであり、これによってある社会の年齢人口傾向のなかで個人（個体）が老いたものとしてあることの位置づけが確定される。マクロでの比較のために小谷（人類生態）、中村（霊長類）という本来は生物系の研究者を分担者として加えたのはこの理由による。

人類文化という現象の地平を客観的に位置づけるために、ヒト以外の霊長類社会における「老い」をめぐる個体間関係にも眼を向け、人間社会での「老い」の機能との対照・異同を確認する。このように対面的社会というミクロから進化的形成という超マクロに至る諸階梯を踏まえ、再度「老い」にまつわる正負の相克という価値の問題にフィードバックする。

本研究の組織は代表者と5名の分担者の計6名からなる。基盤研究（B）としてはやや大型の研究組織である。内堀、高橋、加賀谷の3名は文化人類学、広瀬は社会人類学の基礎の上に立ったメディア教育学、小谷は人類生態学、中村は霊長類生態学（霊長類社会学）を専門としてきた。6名全員がこれまでの研究歴のなかで、それぞれ長く関わった調査対象地域（制度）を有している。内堀はマレーシア・サラワク州のイバン人社会とマダガスカル人のザフィマニリ人社会、高橋はフィンランドのスウェーデン語話者社会、加賀谷は沖縄県竹富町波照間島の住民社会、広瀬はアメリカ合衆国における老人ホームと学習施設、小谷はパプアニューギニアのボサビ人社会とマレーシアの半島部先住民（オランアスリ）であるパテ社会、中村はタンザニアのマハレ山塊国立公園に住むチンパンジー群である。本研究においても、各人はこれらの対象地域（制度）を中心に調査研究を進め、それにもとづいて研究集会における討議対象となる比較資料の実を得るという方法を採用した。

4. 研究成果

「老い」をめぐる文化に関して、多角的な視点から社会・文化間の比較および種間比較を行い、それぞれの社会に生きる個々の人間にとって「老い」がもつ正負の価値を実証的に秤量したことが本研究の成果である。これによって「人間の生涯」の意義を、「老い」から遡行的に語る回顧生活史と、日常生活における老人同士および老若世代間のインタラクティブな交渉の観察を通して、「全生涯過程における老いの発生」という大きな枠組のなかで理論化することができた。これにより実践面まで含めて「老い」に文化がいかに関わるかという議論に、学術的実証的に意味ある貢献をなした。チンパンジーという人間にとっての異種における高齢個体の存在に目を向けられた意義も大きい。

以下、研究年度別に代表者と分担者による調査研究活動、およびそこから得られた成果について記す。

初年度 代表者（内堀）はマレーシア・サラワク州の北部リンバン省・ミリ省を中心として複数のイバン人居住村落（ロングハウス）を訪れ、サラワク州南部地方のイバン人の北部への移住という事象に関して、老年者がどのような意見をもっているか、また移住にどのような役割を果たしたかを中心に追究し、とりわけ老年者同士の再婚にからむ問題について意義深い知見を得た。また国内では沖縄八重山地域の概況調査を開始した。中村はタンザニア・マハレのチンパンジーを対象として老齢個体の観察を開始した。高橋はフィンランドのバルガス町で計1か月半に渡る調査を行い、高齢者を対象とした緊急連絡サービス、および親族介護と行政による親族介護者への支援の現状を追求し、人口の過疎な地域で在宅生活を送る高齢者を支えるケアの様態についての新知見を得た。理論活動として、老齢問題を研究する国内の研究者（コメントータを含み6名）を招聘し、3回の研究集会を開催した。第1回は沖縄の高齢者生活およびケア、第2回は日本における自然葬運動と年齢との関連、第3回はアフリカにおける老人の相対的に高い社会的位置づけに関するものである。各回とも本研究分担者のほか大学院生等の参加を得て、社会間比較に関して有益な議論を展開した。

第2年度 研究代表者と研究分担者による海外と国内における現地調査は、(1)マレーシアとオーストラリアにおいてイバン社会における老人ケアの変化および日本人高齢者のリタイアド・ライフ調査を通じて比較の視点を追究（内堀）、(2)タンザニア・マハレ国立公園内のチンパンジー社会においてデモグラフィーの把握のため個体情報のアップデートと、老齢個体を含む数個体の個体追跡（中村）、(3)沖縄・波照間島において、高齢者ケア施設が小規模多機能型施設に移行したことによるケアの内容及び地域での活動内容の変容を追い介護保険法が沖縄の離島社会に及ぼす影響に関する知見を得（加賀谷）、(4)フィンランドのバルガス町で、公的なケアサービスを利用していない高齢者に対するインタビューから、インフォーマルケアの実態を把握し、行政の在宅介護サービスの組織改革についての参与観察と、医師の往診に同行し、辺境医療・介護の実態を調査することにより新自由主義的なイデオロギーが浸透していく様子を観察した（高橋）。また小谷はマレーシア・オランアスリに対するフィールド調査準備を進めた。

第3年度 研究代表者（内堀）と分担者（高橋）は6月に英国オックスフォードのブルックス大学で開催された「人類学、老年学、生涯学会」AAGE（Association of Anthropology, Gerontology and the Life Course）第10回研究大会に出席し、内堀はマレーシア・イバン社会における老人および弱者のケアの特質について、高橋は老人ケアと生涯研究に関わる理論的側

面について、それぞれ研究発表を行った。本研究の平成 29 年度の国内における共同研究の理論活動としては、研究集会開催が 1 回のみ(7 月)にとどまったが、そこで上記国際研究大会の全体的内容と意義について内堀と高橋が報告を行い、他の研究分担者および研究補助に加わっている若手研究者との間で緊密な討議をもった。この討議の内容を整理して、内堀と高橋は日本文化人類学会の機関誌『文化人類学』第 82 巻 4 号に報告記事として掲載した。

研究代表者と研究分担者による海外と国内における現地調査は、(1)マレーシアのサラワク州におけるイバン社会における老人ケアと生涯コースの調査を継続し、また同国ペナン州における日本人のリタイアド・ライフの問題点と近年の動向を探ったこと(内堀)、(2)タンザニア・マハレ国立公園内のチンパンジー社会においてデモグラフィーの把握のため個人情報アップデータ調査を継続したこと(中村)、(3)福島県大沼郡金山町における高齢者福祉の実態調査を行ったこと(加賀谷)、(4)フィンランド南西部において独居高齢者のインタビューを中心とするフィールドワークを 2 回行ったこと(高橋)、(5)マレーシア・クランタン州においてオランアスリの人口学的な動向に関する調査を若手研究補助者(協力者河合)とともに 2 度にわけて行ったこと(小谷)である。

最終年度(2018 年度)には研究代表者の内堀と分担者の小谷は研究協力者 1 名とともにマレーシア・ペナン市で開催された第 12 回国際狩猟採集民学会において「生涯研究」と「老年研究」に関する分科会を主催した。分担者高橋は IUAES(国際人類学民族学ユニオン)第 18 回世界大会、日本文化人類学会第 52 回研究大会でフィンランド高齢者に関わる発表を行った。分担者中村は第 27 回国際霊長類学会の招待講演でマハレの雌チンパンジーに焦点を当てた個体間関係についての招待講演を行った。またこれらの成果に基づいて、研究期間後になるが 2019 年 6 月に開催された日本文化人類学会第 53 回研究大会において、「生涯学の文脈から見た老年研究の課題」と題する分科会を開くこととなった。

現地調査として内堀はマレーシア・サラワク州におけるイバン人住民の集落および都市での異世代間関係の観察資料収集を行った。小谷、高橋、加賀谷も各自専門とする地域社会(マレー半島、フィンランド、沖縄)において、高齢者の社会的位置づけについて調査し、広瀬は、全米 117 大学内に 50 歳以上を対象に低料金で無単位コースを提供する The Osher Lifelong Learning Institute(77 年設立)に焦点をあて、カリフォルニア大学サンディエゴ校で調査を行い、高齢者全体の高等教育のニーズ、若者との交流、知覚や運動機能の衰えを補う情報技術のアクセシビリティの向上等高齢者の学びを中心に観察と聞き取りの資料を得た。中村はマハレ地区のチンパンジーの個体追跡のなかで高齢個体に注目した調査を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

Uchibori Motomitsu Not After the Deluge: A Note on Discourses on the Local Flood Experiences in the Upper Skrang, Ngingit, 9 号, 査読無, 2017, 7-17

Odani Shingo, Population Dynamics among the Orang Asli of Peninsular Malaysia, *Senri Ethnological Studies* 95 巻, 査読有, 2017, 150-171

Nakamura Michio, Masturbation with a tool by an infant male chimpanzee, *Pan Africa News*, 25 号, 査読有, 2-4, 2018, DOI10.1002/ajpa.23327

内堀基光 「講演録 日本文化人類学会 第 50 回研究大会記念シンポジウム人類の道德性と暴力性をめぐって 隣接諸科学との対話」(長谷川真理子、山極寿一と共著) 年報人類学研究第 7 巻、2017、34-73

小谷真吾 「人口減少地域におけるソーシャルキャピタル概念の適用に関する文化人類学的検討」 日本健康学会誌 84(6) 査読有、2018、198-202

高橋絵里香、「フィンランドの高齢者ケア政策と老いのかたち」 作業療法ジャーナル、50(12) 査読無、2016、1312-1315

〔学会発表〕(計 7 件)

Uchibori Motomitsu, Characteristics of community of care: hunter-gatherers in the light of swidden cultivators, The 12th International Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018, Penang Malaysia. (国際学会)

Odani Shingo, Prospects for Life-Courses and Caring Systems Revealing from Changing of

Demographic Structure of Bateq Community, Peninsula Malaysia, 12th International Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018, Penang Malaysia (国際学会)

Nakamura Michio, Association and social relationships among female chimpanzees of Mahale, 2018, 27th Congress of International Primatological Society, (国際学会招待講演), Nairobi.

Takahashi Erika, Generations, social order and old age, Association of Anthropology, Gerontology and the Life Course, 10th conference, 2017, Oxford Brooks University.

Takahashi Erika, The logic of “Optimized Care: The rise of a “citizen-consumer” in Finnish eldercare services, Colloquium: Thinking about an anthropology of care, 2017, (国際学会招待)

Takahashi Erika, Publicly Privatized: Interpreting the relative care support services in Finland and the neoliberal reform of Nordic welfare states, 2018, 18th IUAES World Congress (国際学会, Brazil).

Kagaya Mari, Practicing Communal Living without having Community: Practices designated as Cultural Properties, 2018, American Folklore Society, Summer Folklore Institute (国際学会招待), USA.

〔図書〕(計 4 件)

Uchibori Motomitsu, The Spirits as the Other: from the Iban Ethnography, in Kawai Kaori (ed.) The Other: The Evolution of Human Sociality, Kyoto University Press, 500 (325-346), 2019.

高橋絵里香 「先住民と言語的少数派：フィンランドのサーミとスウェーデン語話者」、深山直子、丸山淳子、木村真希子(編)『先住民から見る現代世界：わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』、昭和堂、288 (213-217), 2018.

高橋絵里香 「誰がボタンを押すのか：フィンランドの緊急通報システムにみる要求/提供のダイナミクス」、浜田明範(編)『再分配のエスノグラフィー：経済、統治、社会的なもの』、悠書館、248 (39-62), 2019.

加賀谷真梨 「プロセスとしての共同体：沖縄・波照間島の「戦争マラリア」をめぐる語りを事例に」。谷川健一・大和岩雄(編)『民衆史の遺産第14巻 沖縄』、大和書房、500 (391-412), 2019.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.anth.l.chiba-u.ac.jp/gerontology/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：広瀬 洋子

ローマ字氏名：Hirose Yoko

所属研究機関名：放送大学

部局名：教養学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80208884

研究分担者氏名：小谷 真吾

ローマ字氏名：Oadani Shingo

所属研究機関名：千葉大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：90375600

研究分担者氏名：高橋 絵里香

ローマ字氏名：Takahashi Erika

所属研究機関名：千葉大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：90706912

研究分担者氏名：中村 美知夫

ローマ字氏名：Nakamura Michio

所属研究機関名：京都大学

部局名：理学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30322647

研究分担者氏名：加賀谷 真梨

ローマ字氏名：Kagaya Mari

所属研究機関名：新潟大学

部局名：人文社会・教育科学系

職名：准教授

研究者番号（8桁）：50432042

(2)研究協力者

研究協力者氏名：河合 文

ローマ字氏名：Kawai Aya

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。